

令和6年度ミニ企画展(2)

小山富士夫の越中瀬戸窯発掘調査展

昭和15年(1940)、東京帝室博物館(現 東京国立博物館)が行った越中瀬戸窯発掘調査は、越中瀬戸焼復興の大きな原動力になりました。その2年後に行なわれた再発掘は、東洋陶磁研究家・陶芸家として名高い小山富士夫が担当し、越中瀬戸焼歴史研究の礎を築くことになりました。

本展は、その発掘調査に至った経過や歴史的意義を明らかにしようとするものです。

謝辞 本展にあたり次の方々からご教示・ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

釋永 由紀夫 吉野香岳 大畑 年 藤田英雄 間野 達
 公益財団法人根津美術館 公益財団法人出光美術館 富山市郷土博物館
 立山町新瀬戸地区 立山町文化財保護審議委員会 越中瀬戸焼歴史研究会
 (順不同・敬称略)

1 再発掘に至るまで

昭和15年の発掘調査後、担当した東京帝室博物館鑑査官 鷹巢豊治は、雑誌『茶わん』に報告を掲載し、その後発掘品は富山に返却された。長島勝正は発掘品を北陸配電(株)本社ビル(今の富山電気ビル)に展示した。

帝室博物館の調査資金を提供した北陸配電(北陸電力の前身)山田昌作社長は、趣味仲間の田辺加多丸(当時日本勧業銀行理事)を招き展示見学したところ、再発掘調査の機運が高まった。鷹巢は東京空襲対応や特別展観で多忙であったため、田辺は、知人の東洋陶磁研究者 小山富士夫に調査担当者を依頼し、発掘への準備が整えられた。

2 発掘調査の行程

発掘調査の内容は、調査に同行した田辺加多丸が書いた「越中瀬戸古窯の秋」によって知られる(『美術・工芸』9号美術・工芸編集部、『高志人』7巻12号 高志人社)。

昭和17年10月25日、小山ら(北陸配電常務)・翁久允(高志人社主宰)が出迎え、上市町荒屋でコレクションを見学後、現地に到着した。

25日は、①上末陶器窯跡(現上末古窯跡群)、②上末山下窯跡、③彦右衛門墓石、④彦右衛門



上末陶器窯跡発掘推定品

(旧新瀬戸小学校保管)

窯跡、⑤中窯跡（長八窯）、⑥陶片塚、⑦彦市窯跡（孫市窯跡のこと）、⑧吉田甚兵衛窯跡（現甚兵衛窯跡）、⑨六兵衛窯跡、⑩作兵衛窯跡、⑪甚兵衛窯西隣の窯跡、を見学した。

上末陶器窯跡では、萩中喜代治（上市の越中瀬戸焼収集家）が指揮する「先発隊」が発掘済みで、小山らが発掘品の観察を行った。

田辺は25日に帰ったため、26日の発掘箇所について記録がない。

27日は、電気ビルにおいて小山の発掘成果の講話が開催された。よって発掘作業は、上末陶器窯跡のほか26日一日だけで、数か所にとどまったと思われる。

3 発掘調査の成果

この発掘調査の成果について、小山がまとめたものは存在しない。

小山は「鷹巢の代理」と思っていたふしがある。後年鷹巢は小山の発掘成果も含めて『世界陶磁全集』第6巻（河出書房）で越中瀬戸焼をまとめたが、そこで「筆者は去る昭和十五年、同十六年、同十七年の三回に互って親しく此の古窯跡を発掘し」たと述べている。鷹巢は昭和15年調査において彦右衛門窯跡から茶入1点を発掘していたが、その後『世界陶磁全集』では3点が掲載され、2点増えている。これは小山の発掘で新たに見つかったものと推定される。

4 発掘品の行方

小山の発掘品の行方については、これまで明らかになっていない。

茶入3点や鷹巢が『世界陶磁全集』で報告した陶片は、その後も東京国立博物館に収蔵されたままとみられ、富山市郷土博物館には所在不明である。

最近、旧立山町新瀬戸小学校倉庫に保管されていた越中瀬戸焼陶片等が発見され、それには上末古窯跡群の須恵器片124点、越中瀬戸焼陶片・窯道具188点が含まれていた。

越中瀬戸焼陶片・窯道具の中には、注記（墨書き）や紙ラベルが貼られたものがある。

昭和15年東京帝室博物館発掘品（富山市郷土博物館蔵）には、活字の印字や手書きのラベルが貼られており、それと同じものを含むほか、地名「上末」をデザインした商品ラベルを切って貼ったものがある。

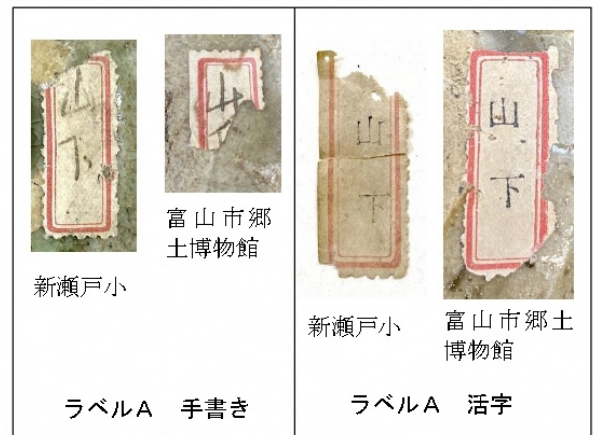


旧新瀬戸小学校保管品



上末山下窯陶片に貼られた紙ラベル

旧新瀬戸小学校保管品



上末山下窯陶片の紙ラベル比較

それぞれ右は東京帝室博物館発掘品（1940）

これらのうち、帝室博物館発掘品と同じラベルのものは、発掘品を地元資料として頒けてもらったものであろう。商品ラベルのものについては詳細不明である。

●「馬の爪」の話

田辺の「越中瀬戸古窯の秋」には次のエピソードがある。

「小山君が『馬の爪』なるものを拾ってみせた。之は當時の窯が半地上式の証左で、匣を水平に位置する為に、匣の下に置く道具であると教へた。」

＊注 「匣」とは皿・碗などを入れて焼く匣鉢さやばちのこと

これに該当すると思われる“馬の爪”＝焼台やきだいが、これらの資料に含まれていた。これには「馬ノ爪 山下窯 昭一七・七・八」とあり、発掘調査と同年に採集したものである。馬の爪は小山によって初めて明らかになった用語であり、日にちが早いのは、「先発隊」せんぱつたいが前もって発掘していたためであろう。

以上のことから、旧新瀬戸小学校保管品には、小山の発掘品が少なからず含まれていると思われる。

5 根津美術館蔵の越中瀬戸焼陶片

根津美術館は、発掘調査と同じ年、小山富士夫が嘱託として勤務し始めた博物館である。小山は、根津美術館を全国の陶磁器窯跡の調査研究センターとする目論見もくろみがあったともいう。そうであれば、この越中瀬戸窯の発掘調査は、その最初の調査とも位置づけられよう。



紙ラベル裏の文様復元



上末山下窯の窯道具（焼台）

旧新瀬戸小学校保管品

根津美術館では、越中瀬戸焼陶片 14 点を所蔵している。記録や陶片への注記はなく、収蔵された経緯や時期は不明である。

写真からは、上末山下窯の最初^{うわすえやました}期製品（安土桃山時代^{あづちももやま}）は含まれておらず、江戸時代寛永年間^{えど かんえい}（1620 年代）以降の鉄釉の碗・皿^{てつゆう わん}が主体である。

確証はないものの、小山の採集品の可能性がある。



根津美術館所蔵 越中瀬戸焼陶片

6 小山の越中瀬戸焼への思い

小山富士夫による越中瀬戸窯発掘調査は、1940 年東京帝室博物館鷹巣豊治の代理調査であったことから、小山自身が発掘調査の研究を行なうことはほとんどなかった。

しかし、小山は別の形で、越中瀬戸焼復興に協力した。

親友である富山出身の陶芸家 石黒宗磨^{いしぐろむねまろ}（初の人間国宝）は、昭和 10 年頃越中瀬戸焼研究所（立山町上瀬戸）で作陶や陶工の指導をするなどし、一説に鷹巣の発掘調査をきっかけとして越中瀬戸焼復興に取り組むようになった。

石黒は、小山の「助力」を取り付け、小山の発掘調査後から具体的に活動を進め、作陶・築窯に向けて段取りを進めた。

小山の助力決意は、発掘調査担当以前のことであり、この流れが小山に発掘調査の担当了承を推し進めたとも考えられる。

小山は石黒と共に活動を進めた。小山は、地元にとって発掘調査の貢献者であった。にもかかわらず、石黒・小山の復興計画は、地元陶工らとのあつれきが生じ、撤退を余儀なくされた。



展示期間 令和 6（2024）年 11 月 16 日～令和 6（2025）年 4 月 26 日

立山町歴史交流ステーション 日なた
〒930-0234 富山県立山町日中上野 83
☎ 076-462-2387
Mail: tateyama-hinata@ma.net3-tv.net

